

# びわじまいせき 琵琶島遺跡 現地説明会資料

## 1 調査の概要

遺跡名：琵琶島遺跡（びわじまいせき）

調査場所：中野市豊津大日影

調査原因：長野県北信建設事務所による県道豊田中野線建設工事

調査期間：平成24年4月9日～10月31日（予定）

調査面積（表面積）：6,700 m<sup>2</sup>（3,500 m<sup>2</sup>）

検出遺構：弥生時代一堅穴住居跡、掘立柱建物跡、平地建物跡（環状、馬蹄形の溝）、柵列跡、土坑ほか、

古墳時代以降一掘立柱建物跡、土坑、焼土跡ほか

検出遺物：縄文土器（押型文土器ほか）、弥生土器（栗林式土器一壺、甕、台付甕ほか）、古墳時代～奈良・平安時代（土師器、須恵器ほか）、石器（石鏃未製品、剥片ほか）

## 2 遺跡の位置と地形

琵琶島遺跡は、千曲川が大きく蛇行しながら流れる長野盆地の北端、西側の山からの押し出しと千曲川による土砂の堆積によって発達した千曲川左岸の河岸段丘上に位置しています。標高は320～340m。調査地点は、千曲川が最も蛇行し、段丘が強く千曲川に張り出した箇所にあたります。

周辺の遺跡との関連をみると、千曲川下流の2007（平成19）年に銅戈、銅鐸の発見された柳沢遺跡（中野市柳沢）と、上流の県史跡として著名な栗林遺跡（中野市栗林）との、ほぼ中間地点にあたります。



位置図（北信建設事務所提供図に加筆）

### 3 調査の成果

#### ○弥生時代中期後半のムラ

(いまから約 2,000 年前)

琵琶島遺跡の本年度調査は、市道部分と市道下 6 m の千曲川べりで行なっています。表土の下に広がる黒色の遺物包含層をとりぞくと、その下層からは、約 2,000 年前と考えられる弥生時代中期後半のムラが姿をあらわしました。



南側上空より琵琶島遺跡を望む

#### ○弥生人の住まい (竪穴住居跡SB)

調査区北よりに、平成 22 年度の中野市教育委員会の試掘調査でみつかった竪穴住居跡 (SB01) があります。径約 4.3m の円形をしていて、4 本の支柱によって上屋が支えられていたと考えられます。また、この住居の北西側には、3.0×2.5m の小さな方形の家がありました。中央に炉の跡がありますが、人が生活するにはせまく、作業小屋などとして使用したものでしょうか？



竪穴住居跡 (SB01) の完掘 (南から)

#### ○弥生人の倉庫 (掘立柱建物跡ST)

調査区中央には、2 棟の掘立柱建物跡が重なりあって発見されました。南側の ST24 は 3.5×2.6m、北側の ST25 は 4.0×2.6m の大きさで、それぞれ 3 間×1 間の柱間があります。また、南北方向の梁行も 2.6m とそろっており、短い期間内に建てかえられた可能性が考えられます。弥生人が大事な稲もみなどを蓄えた高床式の倉庫の跡ではないかと推定しています。



掘立柱建物跡 (ST24、25) の完掘 (西から)

## ○弥生人の住まいか？（平地建物跡SD）<sup>へいちたてものあと</sup>

調査区の中央、掘立柱建物跡の南側に、平面形が円環状、または馬蹄形をした溝跡が3基みつけられました。「平地建物跡」と呼ばれる遺構に類似しており、今のところ、そうした遺構に関連するものと考えています。



平地建物跡(SD01)の完掘（南東から）

SD01は、径約6.4mのきれいな円環状をしています。しかし、土地の耕作により上面がかなり削平されており、溝の深さは平均すると20cm前後しかありません。本来はもっと深い溝であったようです。また、東側の中央部分は溝が途切れており、建物の入口部分であった可能性が高いと思われます。

SD01の北西側には、馬蹄形の溝、SD03があります。東側は削平されていますが、南北に8.2mと3基のなかでは最も大きく、溝も深いところでは50cm以上あります。南側がくちばし状に開き、入口部分と考えられ、北側の一部分も溝が極端に浅くなり開口していた可能性もうかがわれます。内側の平らな部分には、小さな穴が1つみつけただけで、あとは何もありません。あまり類例のない構造であり、今後、溝内の掘り下げを慎重に行い、性格を推定する材料を増やしたいと考えています。

SD03の南側には、同じ方向に開口部を持つ2回りほど小さいSD02（径約5.2m）があり、それは調査区外にのびていて、半分ほど調査できました。



平地建物跡？(SD03)  
南端断面（南から）



平地建物跡？(SD03)の検出状況（南から）

## ○まとめ

琵琶島遺跡の本年度の調査は継続中ですが、今回、いまから約2,000年前の弥生時代中期後半のムラがみつかりました。寝起きの場である住居跡や倉庫としての建物跡がみつかり、これに、お米をつくる水田跡や人生最後の場所である墓地がみつかり、生活の舞台のすべてがそろることになります。

琵琶島遺跡の中心地は、今回の調査区のもっと南側にあると言われています。そこからは、下の写真と同じ種類の「大型蛤刃石斧」が2点出土しています。20cmをこえる長大な石斧もあり、ムラの中心であることを物語っています。今回の調査区は、ムラの北側のはずれにあたると思われませんが、小規模ながらもムラの北側を固める大事な役割を果たしていた場所なのかもしれません。

ここで発見された「大型蛤刃石斧」は、長野市若穂の榎田遺跡で製作されて運ばれてきた可能性が高いと思われます。千曲川下流の柳沢遺跡、上流の栗林遺跡、南大原遺跡（中野市上今井）、さらに上流の松原遺跡（長野市松代町）と、同時期の遺跡が千曲川沿いには展開しています。これらの遺跡間を、弥生人が行き来していたことは、「大型蛤刃石斧」の動きをはじめ、さまざまな文化的要素から明らかになってきています。琵琶島遺跡は、長野盆地の北端、柳沢遺跡と栗林遺跡のほぼ中間地点にあたるという立地の位置づけから、それらの遺跡間の関係を考える上で重要な遺跡であったと考えています。



大型蛤刃石斧（調査区北側の水田から出土）

### 琵琶島遺跡 現地説明会資料

(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター

電話：026-293-5926

FAX:026-293-8157

現場携帯(問い合わせ先) :090-4522-9979

2012. 8. 9 発行